The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 山片蟠桃『夢ノ代』雑書篇訳注（五） |
| Author(s) | 岸田，知子 |
| Citation | 中国研究集刊. 2014, 58, p. 1-14 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/58640 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　闕号（総五十八号）平成二十六年六月　一―一四頁

# 山片蟠桃『夢ノ代』雑書篇訳注（五）

岸田知子

一、テキストは、関西大学図書館所蔵写本を底本とした。これに句読点等を施した日本思想大系（岩波書店）本を参照した。
一、漢字は常用漢字を用いた。
一、コト、ドモ、シテを記す記号はカナ表記に改めた。
一、送り仮名・振り仮名のうち片仮名は底本による。平仮名は訳注者が施した。
一、底本の欄外書き込みは（欄外：）として該当箇所に挿入した。
一、「　」は底本では章末にある。別本に拠るものと思われる。岩波本に従って本文中に挿入した。
一、各章のタイトルは訳注者がつけた。なお、注はなるべくわかりやすく詳しく書いた。

## 十六　《学問の流れと読むべき書物》

揚子ノ我為ニシ墨氏ノカ子愛スル①、表裏ノ差ヒニテミナ道ニ背ク。孟子コレヲ闢キテ廓如ナリ②。シカルニ③此学荘子④ニ出ルナレバ其聖人ト端ヲ異ニスル⑤コトシルベシ。シカルニ⑥荘子ヲ南華真経⑦ト号シ、列子ヲ沖虚至徳真経⑧ト名ツクル⑨後世ノ羌謬⑩ヲシルベシ。荀子⑪ノ性悪ハ孟子ノ性善ヲ刺ルナリ。シカルニ⑫孟子ノ善トサス性ト、荀子ノ悪トサス性ト、ソノサス処同ジカラズ。ソノ標的同ジカラザル寸⑬ハ善ト云トモ悪ト云トモ云次第ナルベシ。スデニ告子⑭ノサス処モ亦荀子ト同ジ。揚子ノ善悪混ズルノ説⑮見識ナキモノナランカ。多ク孟子ノ外ハミナ志情ヲカ子テ云寸⑯ハ或ハ悪ト云混

スルト云トモ害ナカルベン⑰。荀子ノ書、性悪ノ説ヲ除キテ見ル寸⑱ハ老・荘・列ノ諸子ヨリハ愈ル⑲ベシ。説苑⑳・淮南子・孔叢子・楚辞㉑ノ類ハヨムトモ害ナカルベシ。シカレトモ㉒孔子ノ言ヲ引モノ、論・孟・中庸・大学ニ出ルノ外ハミナ妄説也㉓。決シテ㉔信ズベカラズ。（欄外：諸子及雑書ニ孔子ノ言語ト称スルモノハ、ミナ㉕荘子ノイハユル重言㉖也。）漢土ハ上古ノ神聖ヨリ、周公・孔子・顔・曾・思・孟㉗ノ大賢教ヘヲ施シ玉フニ引カヘテ、戦国ヨリ秦・漢・六朝・唐・五代マデノ儒者カハル〳〵著ス処多シトイヘドモ、ミナ妄誕杜撰ノ書ノミ。ソノ学風ノ流弊ツイニ老荘ニ混濁セラル、コトカナシムベシ。漢魏叢書㉘ノ目ヲ以テソノ人ナキヲシル。経書ヲ注スル人々且歴史ヲ編ム人々ニヲヒテハ、孔安国・鄭玄・班固・馬融・蔡邕・何晏・趙岐・王弼・韓愈ヨリシテ、孔頴達ノ注疏ニ備ル㉙。シカレドモ猶未ダ㉚カリシヲ、宋ノ世ニ至リテ、二程・周・張・欧・蘇㉛ノ大賢並ビ出テ、終ニ朱先生ニ極マリ、六経ノ旨趣蔡然㉜亦世ニ明ラカニナリヌ。ソノ説、四書五経ノ注解ヨリシテ、小学・近思禄・二程全書・語類・語録㉝ノ書ニ詳ナリ。願クハ我子孫タルモノ、宋ノ諸賢ノ書ヲ習読シテ、後ニコノ書ヲ見テ足ラザルヲ補フベシ。却ッテ㉞コノ書ヲ前ニヨミテ、後ニ宋賢ノ書ヲ読ム寸㉟ハ、失フコト多カルベシ。カヘス〳〵モ紊ルコトナカレ

【注】

①岩波は「揚子」を「楊子」に、「墨氏」を「墨子」に、「カ子」を「カネ」に作る。揚子は揚朱、墨子は墨翟。本篇十二に既出。『孟子』滕文公下に「聖王不作、諸侯放恣、処士横議、楊朱墨翟之言盈天下、天下之言、不帰楊則帰墨、楊氏為我、是無君也、墨氏兼愛、是無父也、無父無君、是禽獣也」とある。

②揚雄の『法言』吾子篇に「古者楊墨塞路、孟子辞而闢之、廓如也」とある。廓如は心がからっとして広いさま。昔、楊朱や墨翟の教えが風靡して世の中の道を塞いでいたとき、孟子がこれを断ち切り、世の道をからりと開け放ったという。

③岩波「然ルニ」。

④揚朱は自作の書を残していないが、『列子』に揚朱篇がある。ここは『荘子』ではなく『列子』をいうのであろう。

⑤異端のこと。なお「異端」は『論語』為政篇に「攻乎異端、斯害也已」とあり、聖人の道でない別の学説の意。

⑥岩波「然ルニ」。

⑦唐の天宝元年（七四二）に『荘子』に『南華真経』が命名された。
⑧唐の天宝元年に『列子』に『沖虚真経』が、宋の景徳四年（一〇〇七）に『沖虚至徳真経』が命名された。岩波頭注では景徳二年（一〇〇五）となっている。
⑨岩波はこのあとに「コト」がある。
⑩「差謬」の誤記。
⑪「苟子」は「荀子」の誤記。
⑫岩波「然ルニ」。
⑬岩波「トキ」。
⑭十三に既出。性をめぐって孟子と論争したことが『孟子』告子篇に出ている。告子は性には善も悪もないと主張した。
⑮岩波「揚雄」。揚雄は『法言』にて性には善と悪が混在していると説いた。
⑯岩波「カネテ云トキ」。
⑰「ベン」は岩波「ベシ」。朱子学では性を理（本然の性）と気（気質の性）からなると考えた。理は完全な善であるが、気は情を生み、情は気の清濁によって善悪が生じる。性を「志情ヲカネテ云」うことは、いいかえると理と気を合わせていうことになり、善と悪を含むことになるので「悪ト云、混ト云トモ害ナカルベシ」となる。
⑱岩波「トキ」。
⑲岩波「マサル」。
⑳漢の劉向の著。春秋時代から漢初までの人々の伝記・逸話を集めたもの。
㉑この三書は十二に既出。
㉒岩波「然ドモ」。
㉓岩波「ナリ」。
㉔岩波「必（かならず）シモ」。
㉕岩波「皆」。
㉖十五に既出。信頼性を増すために、昔の聖人賢人の名を借りて述べた言葉。
㉗堯・舜より以来の聖人の道を伝える道統。顔は顔回（字は子淵）、曾は曾参（子輿）。思は孔子の孫の伋（子思）で、『中庸』を書いたとされる。孟は孟子。
㉘岩波「漢・魏ノ叢書」。叢書は、ここではこまごまとしてまとまりのない書物の意。『漢魏叢書』という叢書名ではない。
㉙岩波「備ハル」。孔安国は漢の人。孔子の十二世の子孫。『古文尚書』の伝（注釈）を書いた。これを孔伝という（現在のものは晋の偽作）。鄭玄は後漢の人。馬融の弟子。多くの経書に注釈を施し、今文と古文を

折衷した。班固は後漢の人。『漢書』を書いた。馬融は後漢の人。多くの経書に注釈を施した。蔡邕は後漢の人。琴や書に巧みで「熹平石経」の文字を書いたとされる。何晏は三国魏の人。『論語集解』を書いた。趙岐は後漢の人。『孟子章句』を著した。王弼は三国魏の人。『老子』『周易』の注釈を作った。韓愈は唐の人。古文運動を実践するとともに、宋代の新儒学の嚆矢ともみなされている。孔穎達は初唐の人。太宗の命で『五経正義』を撰述した。「注疏」はそれぞれの経の『正義』(注)、およびその注を疏という。ただ、韓愈は中唐の人で、『五経正義』とは時代が合わない。

㉚岩波「イマダ」。

㉛程明道(名は顥)・程伊川(頤)・周濂溪(敦頤)・張横渠(載)・欧陽脩・蘇東坡(軾)をいう。なお、前の四人に邵康節(雍)を加えた五人を北宋五子といい、朱子学の先駆者として位置づける。

㉜岩波「粲然」。

㉝『小学』は日常道徳について述べた書。宋の朱熹編と伝えられたが、その弟子の劉子澄の著作。『近思録』は『近思録』の誤記。朱熹・呂祖謙の共著。程明道・程伊川・周濂溪・張横渠の著作や語録から六二二条を選び、初学者の入門書としたもの。『二程全書』は二程子の学説を述べた書。「語類」は『朱子語類』をいう。南宋の黎靖徳が朱熹と門人の問答を記録して部門別に分けた書。「語録」は儒者や僧などの談話を筆記した書で、俗語で書いてあるもの。前述の『近思録』や明・王陽明の談話を門人が編集した『伝習録』などが有名。

㉞岩波「却テ」。

㉟岩波「トキ」。

## 【現代語訳】

楊朱の利己主義や墨子の兼愛主義は、表裏の違いがあるだけで、どちらも道にそむいている。孟子は、(楊・墨によって塞がれた)道をからりと広く開いたのである。

ところで、この(楊朱の)学は『荘子』から出ているのであるから、聖人から見れば異端であることを知らなければならない。それなのに『荘子』を『南華真経』と呼び、『列子』を『沖虚至徳真経』と命名したことは、後世の人の誤りであることを知るべきである。

荀子の性悪説は孟子の性善説を批判している。しかし、孟子の善とする性と、荀子の悪とする性とは、その指している性が同じではない。その標的が同じでない場合は、善といっても悪といっても言う人次第であるとい

えよう。すでに（『孟子』に登場した）告子の指す性もまた荀子と同じである。揚雄の善悪混在説は見識のないものではないだろうか。たいてい孟子以外の人がみな志と情を兼ねて性という場合は、悪という人、混在という人があっても害はないといえよう。

『荀子』の書は、性悪説を除けば、『老子』『荘子』『列子』の諸子よりは優れているだろう。『説苑』『淮南子』『孔叢子』『楚辞』の類は読んでも害はないはず。しかし、孔子の言葉を引くものは、『論語』『孟子』『中庸』『大学』に出ているもの以外は、どれもでたらめである。必ず信じてはならない。（欄外：諸子百家の書や雑書に孔子の言葉と称するものは、どれも荘子のいわゆる「重言」である。）

中国は上古の神聖の時代から、周公・孔子・顔回・曾参・子思・孟子という大賢が教えを施されたが、それに引き比べて、戦国より秦・漢・六朝・唐・五代までの儒者が次々に著述したものは多いけれども、どれもでたらめでいい加減な書ばかりである。その学風の流れが、やがて老荘思想に混じってしまったことは悲しむべきである。漢や魏の書物の目次を見ても、該当する人がいなかったことがわかる。経書に注を施した人々や歴史書を編纂した人々については、孔安国・鄭玄・班固・馬融・蔡邕・何晏・趙岐・王弼・韓愈以下、孔頴達の注疏に備わっている。しかしながら、それでもまだ不十分であったのを、宋代になって、二程子・周濂溪・張横渠・欧陽脩・蘇東坡という優れた賢人が続いて登場し、最後に朱先生に行きついて、六経の趣旨が燦然と輝き、再び世に明らかになった。その学説は四書五経の注解に始まって、『小学』『近思録』『二程全書』『語類』「語録」の書において詳しくわかる。願わくば、私の子や孫には、宋の諸賢の書を学び読んで、そのあとで私のこの書を見て足りないところを補ってほしい。反対に、この書を前に読んで、その後に宋賢の書を読むのは、失うことが多いであろう。繰り返して言うが、読む順を乱してはいけない。

## 十七　《日本における学問》

我邦ニテハ応神天皇ノ時ヨリ論語・千字文渡リシヨシナレドモ①中世ニハ徒②ニ仏書・詩書・蒙求③・世説④ノルイノミニテ、忠孝仁義ノ学ハウトカリシナラン。日本紀ニ淮南子ノ語ヲ引カレシヲ以テミレバ⑤コレ亦古ヘヨリアリシナラン。源平ノ後ヨリ文学⑥スタレテ、ツイニ足利氏御ヲ失フニ至ル⑦。士大夫⑧ニ学アル人ナシ。

字ヲシルモノハ唯僧家ノミ。シカルニ惺窩⑨・羅山⑩ノ二先生出テ、文学始メテヒラク。ソレヨリシテコノ道ニ功アル人多シトイヘドモ、山嵜氏⑪・室氏・熊沢氏・中江氏・荻生氏・太宰氏・新井氏・貝原氏・伊藤氏父子・浅見氏⑫等、数輩相踵デコレガ最タリ。中ニモ室・熊沢・貝原・伊藤ノ諸先生、著述モツトモ多シテ、経旨ヲ羽翼ス⑬。当世ニアリテハ、我門ノ諸先生⑭ノ書ヲヨムコトハ勿論ノコトナリ。カヘス〳〵モ門流ノ学流ニ反スルコトナカレ。

【注】

①『日本書紀』応神天皇十六年に百済から王仁が来日し、太子が諸典籍を学んだとあり、また『古事記』には百済王から命を受けて来日した和邇吉師が『論語』と『千字文』をもたらしたとある。王仁は百済では「ワニ」と呼ばれていた。吉師は男性の敬称。『千字文』は南朝梁の周興嗣が武帝の命を受けて、同じ文字を用いずに四字句を二百五十ならべ、初学者の文字の学習のために作ったもので、六世紀前半の作と見られる。応神天皇の時代は四世紀末から五世紀初めごろと考えられるから、王仁が周興嗣の『千字文』をもたらしたとするのは時代的に合わない。『古事記』編纂時において、学問入門の書として有名であった『論語』と『千字文』が書き込まれたのではないか。また、別の『千字文』（例えば魏の鍾繇の作）であるとする説もある。『日本書紀』において『論語』の名がないのは、すでに移入されていたからであると見なす説もある。

②岩波「いたずら」と読んでいる。

③本篇五に既出。

④南朝宋の劉義慶の著『世説新語』。本篇五に既出。

⑤本書神代第三の七に詳述。『日本書紀』神代巻巻首に「古天地未剖、陰陽不分」とあるのは漢の淮南王劉安撰『淮南子』俶真訓に、「古天地未剖、陰陽不判」とあるに基づき、「其清陽者、薄靡而為天」云々は同天文訓に基づく。

⑥『論語』先進篇のいわゆる四科に「文学」は学問の意で用いられている。これが現在の意味で用いられるようになったのは明治以後である。

⑦「御」は統制力をいう。室町幕府は第十五代足利義昭に至って織田信長に滅ぼされた。

⑧本来は中国の高級官僚をいうが、ここは日本の支配階層を指す。

⑨藤原惺窩。はじめ相国寺の僧であったが、朱子学を学び、儒を以て世に立つ。

⑩林羅山。藤原惺窩の門人。本篇七に既出。
⑪岩波は「山崎氏」。山崎闇斎。
⑫室氏は室鳩巣、熊沢氏は熊沢蕃山、中江氏は中江藤樹、荻生氏は荻生徂徠、太宰氏は太宰春台、新井氏は新井白石、貝原氏は貝原益軒、伊藤氏父子は伊藤仁斎とその子の東涯ら、浅見氏は浅見絅斎。
⑬助けること。
⑭懐徳堂の中井諸先生をいう。

【現代語訳】

我が国においては、応神天皇のときに『論語』『千字文』が渡来したということであるが、中世において人々に読まれたのはただ仏教書や詩の書物、『蒙求』『世説新語』の類いだけで、忠孝仁義を説く学には疎かったと思われる。『日本書紀』に『淮南子』の言葉を引いてあるのを見ると、この書も古くから日本にあったのであろう。源平の時代以後、学問は衰退し、やがて足利幕府は滅んでしまう。支配階層に学問のある人はおらず、字を知る人はただ僧侶だけであった。そこに藤原惺窩と林羅山の二先生が出て来られ、学問が初めて開かれた。それ以来、この道に功績のある人は多いけれども、山崎闇斎、室鳩巣、熊沢蕃山、中江藤樹、荻生徂徠、太宰春台、新井白石、貝原益軒、伊藤仁斎とその子東涯ら、浅見絅斎など、何人もの人たちが相次ぎ、この頃が最盛期であった。中でも室・熊沢・貝原・伊藤の諸先生は、著述が最も多く、経書の趣旨の理解を助けるものであった。現在においては、我が懐徳堂の諸先生の書を読むことはもちろんである。繰り返して言うが、我が門流の学問に反してはならない。

## 十八　《坐右におくべき書》

貞観政要①・名臣言行録②・牧氏忠告③・聖諭廣訓④・六諭衍義⑤・帝範⑥・臣軌⑦等ノ書、常ニ坐右ニヲキテコレヲ見ルベシ。自カラ得ル処アルベシ。漢・魏ヨリ以下六朝ノ叢書ト実ニ霄壤⑧ノ差ヒ、同日ノ論ニアラズ。唐・宋ノ諸賢、漢以来ヲ一新スト云ベシ。ツヽキテ清ニ至リ、夷狄トイヘドモ、康熙⑨ノ徳沢四海ニ及ブ。聖諭ノ旨、イタルカナ⑩。ア、古ヘヨリ儒ヲ以テ自カラ居リ、博学ヲ以テ人ニ称セラル、人ノ著ス処ノ書、多クハ天下後世ヲ惑ハスノコトニシテ、世教トナルコト少シ。戦国ヨリ六朝ニ至ル、ミナコレ也。唐ヨリ以後ニ至リテ、記誦詩章⑪多ク、王・李⑫ノゴトキ僻学アリトイヘドモ、ソノ余ハ大抵忠孝仁義ヲ宋⑭トシ勧善懲悪ヲ心トスル賢

者多シ。コレ天下ノ大幸ナリ。苟モ学ニ志ス人、コノ所ヲ踏損ズル時ハ天下ノ廃物トナル。ヨク考フベシ

【注】

①唐の呉兢撰。太宗と群臣との政治上の問答を収録したもの。帝王学の教科書として我が国でも愛読された。

②朱子撰、李幼武補。宋の名臣の言行録。

③「牧氏」は「牧民」の誤記。元の長養浩撰。民政上の要点を書いたもの。

④清の世宗憲帝勅製。康熙帝の聖諭十六条を広訓したもの。

⑤明の范鋐撰。太祖が作った六箇条の教訓を解説したもの。なお、これを八代将軍吉宗が荻生徂徠に和訓させ、室鳩巣に和解を作らせたのが『六諭衍義大意』である。

⑥唐の太宗撰。帝王たる者の模範を収録。

⑦唐の則天武后撰。臣下たる者の模範を収録。

⑧天と地。

⑨清の第四代皇帝聖祖。治政は六十一年に及び、清の地盤を確立した。

⑩岩波「至ルカナ」。

⑪文章を暗記し、口先で読むだけだったり、詩文をただ作るだけで実践を伴わない学問。

⑫明の王世貞と李攀竜。秦漢の文章や盛唐の詩を最高とみなした。彼らを古文辞派と呼び、荻生徂徠に影響を与えた。

⑬かたよった学問。

⑭岩波「宗」。

【現代語訳】

『貞観政要』『名臣言行録』『牧民忠告』『聖諭廣訓』『六諭衍義』『帝範』『臣軌』等の書は、いつも坐右において、これを読むべきである。自然と得るところがあるはずである。漢・魏より以来、六朝の雑多な書とはまことに天と地の違いがあり、同日の論ではない。

唐・宋の諸賢たちは、漢以来を一新したということができる。続いて清に至って、異民族ではあるが康熙帝の優れた恩沢は四海に及んだ。聖諭の趣旨は至上のものであることよ。ああ、昔から、儒者を自任して博学を人に称せられている人が著した書は、多くは天下後世を惑わすことになって、世の教えとなることは少ない。戦国から六朝に至るまで、みなこのようであった。唐より以後になって、暗記や口誦、詩文をつくるだけの学問が盛んになり、王世貞・李攀竜のような偏った学問があるけれ

ども、そのほかはたいてい忠孝仁義を中心として、勧善懲悪を志す賢者が多くいる。これは天下にとって大いなる幸である。かりにも学問に志す人は、ここを踏み損なうと天下の役立たず物となってしまう。よく考えるべきである。

## 十九　《『保建大記』と『靖献遺言』》

日本ノ書籍多シトイヘドモ、世教ニ渉ルハナシ。慶長①以降武徳熾ニシテ、文家モ亦女シ②トセズ。大儒③数輩著ス処ノ書、スコブル④孝弟仁義ヲ説クコト多シ。中ニモ栗山先生ノ保建大記⑤及ビ浅見先生ノ靖献遺言⑥コレガ冠タリ。保建ハ保元建久⑦ナリ。王家ノ衰ハ保元ヲ元トス。鳥羽帝位ヲ崇徳帝ニ譲ル。ソノ後美福門院⑧近衛帝ヲ生ム。ツイニコレヲ大子トシ、崇徳帝ヲシテ位ヲ禅ラシム⑨。時ニ今上⑩三歳。上皇二十三歳。コレヨリ上皇憤ヲオコシ、兄弟ノ争ヒトナリヌ。ツイニ⑪今上崩シテ、又ソノ⑫兄後白河帝立ツ。上皇ノ為ニ亦弟ナリ。関白忠通今上ヲ佑ケ、弟頼長上皇ヲ輔ケ、⑬源平武臣⑭互ニ参リテ、父子兄弟ミナ敵トナル。ツイニ上皇敗シテ讃岐ニ遷サレ玉フ。コレヲ保元ノ乱ト云。コレヨリシテ又平治ノ乱ヲコル。ツイニ威権平氏ニウツリテ、後白河帝ノ暗愚コレヲイカントモスルコトナシ。ユヘニ清盛人臣ノ位ヲ究メ、権勢ヲ弄ズ⑮。諸国ノ源氏兵ヲオコシ、ツイニ平氏ヲ滅シ、安徳帝入水、ソノ弟後鳥羽帝ヲ立ツ。後白河法皇ノ孫ナリ。ソレヨリ義仲・義経ノ艱難アリテ、ツイニ威権頼朝ニ帰シ、建久元年頼朝上下ノ総追捕使⑯トナリテ、永ク武家ノ有トナル。ソノ元ハ鳥羽帝ノ徳ヲ失フヨリ興リテ⑰後白河帝ノ柄ヲ失フニ成ル⑱コトニシテ、二千年ノ天下ツイニコ、ニヲヒテ変スルモノナリ。保元ノ大変⑲、上天子ヨリ文官⑳・武官互ニ骨肉ヲ以テ相争奪ス。忠孝仁義ノ道イツクニカ在ルヤ。日本ノ歴史モトヨリ褒貶ノコトナシ。コ、ニヲヒテ㉑栗山氏専ハラ褒貶議評ヲ立テ、コレヲ与奪ス㉒。ソノ意春秋ニナラヒテ㉓乱臣賊子㉔ヲシテ罪ヲ入ル、処無カラシムルモノ、ア、本朝ニヲヒテ未発㉕ノ書ナリ。ヨムモノヨク玩索㉖シテ考フル所アラバ、ソレ差ハザルニ庶幾カラン。靖献ハ商書㉗ノ箕子㉘「自靖自献于先生」㉙ノ語ニ取ル。三仁ハ孔子スデニコレヲ称シ㉚、天下ソノ仁ヲシル。故ニコレヲ挙ゲズシテ、屈原以降ノ八忠臣㉛ヲ主トシ、挙ゲテソノ余コレニ類シタル忠臣ヲ褒シ、又コレニ反シタル賊臣ヲ貶シテ、天下ノ忠・不忠ヲ正スコト私意ヲ以テセズ。万世ニ渉リテ議論ナカルベシトス。イハユルソノ人ニハ、屈平・諸葛亮・陶潜㉜・顔真卿・文天

祥・謝枋得・劉因・方孝儒㉝ノ八忠臣也。ソノ余、引テ推論ズル忠臣数十人、反賊モ亦数十人。ア、浅見氏ノ骨髄コノ書ニアリ。コノ書ヲヨミテ涕ヲ堕サヾル人ハソノ人必不忠ナラン。又コノ書ヲ以テソノ浅見氏ノ人トナリテ想像㉞スベシ。コヽニオヒテカ予栗山浅見二先生ノコノ二書ヲツ子ニ愛玩スルコト久シ㉟。ユヘニ論コヽニ及ブモノナリ。我邦ノ述作ニヲヒテハ、先コノ書ヲ以テ最トシ読ベシ。自カラ得ル処アラン。必シモ㊱コレヲ廃スベカラズ。ユヘニ丁寧反復ス。

【注】

①年号。一五九六年十月から一六一五年七月。徳川家康が江戸に幕府を開いたのが慶長三年（一六〇三）なので、ここは江戸開府以来の意。

②「女」は「少」の誤記。岩波「少トセズ」。

③岩波「大徳」。頭注に「諸本『大儒』」とある。「大徳」は高僧を指すから、意味の上でも「大儒」のほうが正しいと思われる。

④すこぶると読む「頗」は、やや多く、かなり、という意。日本語としては、おびただしく、はなはだ、の意となった。ここは前者の意と取っておく。

⑤水戸藩儒栗山潜鋒撰。保元の乱から建久年間に頼朝が将軍になるまでを記したもの。

⑥浅見絅斎撰。浅見は崎門三傑の一人。

⑦保元は後白河・二条天皇朝の年号、一一五六年四月～一一五九年四月。建久は後鳥羽・土御門天皇朝の年号。一一九〇年四月～一一九九年四月。

⑧鳥羽天皇の皇后。中納言藤原長実の娘で近衛天皇の母。

⑨岩波「ユヅラシム」。

⑩今上天皇のこと。その当時の天皇をいう。

⑪岩波「終ニ」。頭注に「B本『時ニ』」とある。

⑫岩波「其」。

⑬岩波「輔ク。」

⑭岩波「源平ノ武臣」。

⑮岩波「弄ブ」。

⑯追捕使は平安時代に治安を守るために置かれたが、平安末期には総追捕使が寺社・荘園にも置かれた。源頼朝の時代になり、守護・地頭が設置されるようになると、総追捕使の名は守護となった。守護の任命権は将軍にあったから、将軍の異称ともなった。

⑰岩波「興リ」。

⑱岩波「ナル」。

⑲保元元年七月に起こった「保元の乱」をいう。皇室内部では崇徳上皇と後白河天皇、摂関家では藤原頼長と

忠通の対立が激化して争ったが、崇徳側が敗れて上皇は讃岐に流された。この乱が武士の政界進出の契機となったとされる。

⑳岩波「文官」。

㉑岩波「ヲヒテカ」。

㉒左に「アタヘウバウ」と記す。

㉓『春秋』は孔子が善悪を褒貶して作ったとされた。

㉔君主や親に対し、道にはずれたことをする臣下や子のこと。『孟子』滕文公下に「孔子成春秋而乱臣賊子懼（孔子、春秋を成して、乱臣賊子懼る）」とある。

㉕もとは『中庸』に出てくる語で、喜怒哀楽の感情がまだおこらないことをいうことから、まだ外に現れないことを広くいうようになった。

㉖左に「モテアソヒモトメ」と記す。

㉗『書経』の中の殷時代（商ともいう）のことを書いた部分。「湯誓」から「微子」まで十一篇ある。

㉘殷の紂王の一族。紂王を諫めたが聞き入れられず、狂人のふりをして身を保った。周の武王が紂王を滅ぼした時、招かれた箕子は「洪範」を教えたという。武王は箕子を朝鮮に封じた。

㉙『尚書』微子篇の言葉。「先生」は「先王」が正しい。「自ら靖んじ自ら先王に献ず」と訓読する。

㉚三仁は本篇十三に既出。『論語』微子篇に「微子去之、箕子為之奴、比干諫而死、孔子曰、殷有三仁焉」（微子これを去り、箕子これが奴と為り、比干は諫めて死す。孔子曰く、殷に三仁あり）とある。

㉛下に列記する屈平（字は原）より方孝孺にいたる八人をいう。

㉜底本では「潜」をこざとへんに誤記。

㉝正しくは方孝孺。

㉞左に「ヲモイヤル」。

㉟蟠桃は升屋の手代向けの教育のため、この書を講釈させているという（岩波頭注）。

㊱本書においては「必シモ」は「必ず」の意で用いられている。

## 【現代語訳】

日本にある書籍は多いとはいっても、世の教えに関わるものはない。慶長年間以降、武道が盛んになり、学者もまた少なくはなかった。儒家の大学者といわれる人たちの著す書には、少なからず孝弟仁義を説くものが多かった。中でも栗山（くりやま）先生の『保建大記（ほうけんたいき）』や浅見先生の『靖献遺言（せいけんいげん）』はその筆頭である。

「保建」とは保元建久のこと。天皇家の衰退は保元を

起源としている。鳥羽帝が位を崇徳帝に譲った。その後、鳥羽帝の皇后美福門院が近衛帝を生んだ。そこで、これを太子とし、崇徳帝に位を譲らせた。その時、今上帝は三歳、上皇は二十三歳であった。このことがあって、上皇は憤られ、兄弟の争いとなったのである。やがて今上帝が崩じて、またその兄の後白河帝が即位した。上皇にとってはまた弟になる。関白忠通は今上帝を、弟頼長は上皇を助け、源・平の武臣が互いに入り混じり、父子兄弟が皆な敵となった。やがて上皇は敗れて讃岐に流されてしまわれた。これを保元の乱という。これが原因となって、さらに平治の乱が起こった。そして威権は平氏に移り、暗愚な後白河帝はこれをどうすることもできなかった。そのため清盛は人臣の位をきわめ、権勢を弄ぶことになった。諸国の源氏は兵を起こし、やがて平氏を滅ぼし、安徳帝は入水して、その弟の後鳥羽帝が立った。後白河法皇の孫である。それ以後、義仲・義経は苦労を嘗め、やがて威権は頼朝のもとに帰した。建久元年に頼朝は天下の総追捕使となり、以後天下は長く武家のものとなったのである。その元は鳥羽帝が徳を失ったことに始まり、後白河帝が権力を失ったことによってできあがったのであって、二千年の天下はついにここにおいて変化した。保元の乱は、うえは天子から下は文官・武官に至るまで、互いに肉親同士が相争った。忠孝仁義の道はどこにあるというのか。

日本の歴史にはもともと外から褒貶の批判をすることはなかった。ここにおいて栗山潜鋒氏が褒貶の批評を立てて歴史事実に当てはめた。その意図は『春秋』にならって乱臣賊子に罪を興させないようにさせるもので、ああ我が国においていまだ見られなかった書である。読む者がよく内容を調べて考えつくことがあれば、間違いを起こさないことに近づくのである。「靖献」は「商書」の箕子の「自ら靖んじ自ら先王に献ず」の語に由来する。三仁については孔子がすでにこれを称賛しているから、天下中が彼らが仁であることを知っている。だから、これを取りあげないで、屈原以後の八人の忠臣を中心にあげて、そのほかのこれに類した忠臣を褒め、またこれに反した賊臣を誹謗して、天下の忠・不忠を正すことには私意を用いなかった。これには万世に渉って議論はないであろう。ここでいわゆる忠臣とは、屈平・諸葛亮・陶潜・顔真卿・文天祥・謝枋得・劉因・方孝儒の八忠臣である。そのほか引き合いにして論じた忠臣は数十人、反賊もまた数十人いる。ああ、浅見氏の精髄はこの書にある。この書を読んで涙を落とさない人は、その人は必ず不忠であろう。またこの書から著者浅見氏の人と

なりを想像すべきである。ここにおいて、私は栗山・浅見二先生のこの二書を、かねてより常日頃愛玩している。だから、この書の論もここまでに及ぶのである。我が国の著述においては、まずこの書を最上として読むべきである。読めば自然に得るところがあるであろう。必ずこれを廃棄してはならない。だから丁寧に繰り返すのである。

## 廿　《『大学衍義』》

大学衍義①ノ書ハ、上六経ヲ祖トシ、歴史ニ正シテ事実ヲ踏②ミ大学八条ノ目③ニ序デ、致知格物、正心誠意、修身ヨリ天下国家ヲ治ムルノ実行ヲ展ブ。其次序・節目丁寧云バカリナシ。上天子ヨリ下庶人ニ至ルマテ、コノ書ヲヨミテ拳々服膺④シテ、事ニコレニ徒フ⑤寸ハ、天下ヲ治ルコト掌ヲ反スヨリ易カルベシ。カヘス〳〵モ捨ルコトナカレ。後世ニ生レタル幸ニハ、カヽル書アリ。及ビ貞観政要ソノ余、前ニ序列スル書ルイヲヨメバ、コレ己ヲ修メ人ヲ治ムルノ楷梯⑥・要法ミナ詳密ニシテ、師ナクシテモ天下治マルベシ。徒コレ学ブト学バザルトニアリ。為ルト為サルトニアルノミ。古ヘノ疎ト今ノ密ト、古ヘノ実ト今ノ虚ト並べ行ハル、ユヘニ、今ノ治法ハ能ハザルナリ。盛饌⑦備ヘテ食ハズ、雅楽⑧奏シテ聴ズ、美食並ベテ視ズ。惜ムベキカナ。

【注】

①宋の真徳秀撰。首に為治の要、為学の本を述べ、次は格物致知、誠意正心、修身、斉家の四大綱を説く。
②岩波「踏」。「踏」は「せまる」の意。
③朱子は『大学』の格物・致知・誠意・正心・修身・斉家・治国・平天下を八条目とした。
④両手で物を捧げ持つように、心に抱いて忘れずに守ること。『中庸』の言葉。
⑤岩波「従」。
⑥岩波「階梯」。階段。目標に到達するための手引き。
⑦見事なごちそう。
⑧正しい音楽。平安時代以後に宮廷で行われた音楽を指すこともあるが、ここは上述の意であろう。

【現代語訳】

『大学衍義』の書は、古くは六経に遡り、歴史に正して事実を踏み行い、『大学』の八条目を並べ、致知格物、正心誠意、修身を説いて天下国家を治めるための実際を展開した。その項目の順序や要所の丁寧さはいうことが

できないほどである。上は天子から下は庶人に至るまで、この書を読んでいつも忘れずに心に抱いて、物事にあたってこれに従いさえすれば、天下を治めることは掌を返すよりたやすいであろう。繰り返していうが、これを捨ててはいけない。後世に生れたことで得られる幸運は、このような書を得られることである。加えて『貞観政要』やそのほかの前述の書などを読めば、自身を修養し人を治める手引きや要法がすべて詳密に書かれていて、師がなくても天下は治まるはずである。ただ、これを学ぶか学ばないか、なすかなさないかに違いがあるだけである。昔の粗雑なものと今日の細密なものと、昔の実態あるものと今日の空虚なものとをならべて行われるので、今日の治法はうまく行われないのである。ご馳走が備わっているのに食べず、正しい音楽が奏でられているのに聴きもせず、おいしい食べ物を並べても見ようとしないようなものだ。惜しいことである。